日本YMCA同盟

THE YMCA

The Young Men's Christian Association News

10

No.850 2025

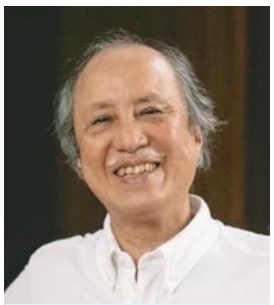
2025年10月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日　第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003　東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640　Fax 03-5367-6641
URL：https://www.ymcajapan.org/
発行人／田口 努　編集人／横山 由利亜

広島YMCAインターナショナル ユース ピースセミナーより（=2面）

OPINION

「市民」運動体として
～過去・現在、未来におけるYMCAの役割

日本基督教団 秋田飯島教会牧師 **中原 眞澄**



元 東京YMCA ／熊本YMCA ／日本YMCA同盟職員、盛岡YMCA会員

「戦後80年」今年、盛んに論じられたテーマですが、YMCAはどうだったでしょう。

2500年ほど前、聖書の出エジプト記は40年を一世代としました。同じ体験をした人が社会を担って40年。彼らが人生を終えるのが倍の80年。10年前に亡くなった元ドイツ連邦大統領ヴァイツゼッカーが「荒れ野の40年」と題し、自国の戦争犯罪について、とりわけ直接体験のない世代が担う責任について、真摯に語ったのが40年前でした。その一節「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります」は人々に感銘を与えました。私が気になるのは、閉じはせずとも＜薄目＞で見ているのが現代の日本ではないか、と。過去も現在も薄ボンヤリと見ている者が、未来を明らかに描くことはできないでしょうから。

戦争をめぐる歴史理解には、被害と加害双方を見据え、失敗体験を吟味することが大切であることは、個人体験の反省と同様です。加えてYMCAの場合、活動を巡り、個別の文脈だけでなく、広い文脈から見ることが求められます。何故なら、例えば過去の植民地や占領地での活動が善意でなされたことは確かですが、その活動が相手社会にとって、とりわけ歴史的文脈から見て、プラスの結果をもたらしたとは限らないからです。

YMCAはその最初期から人を「精神・知性・身体」さらに「社会性」を備えた全的存在として捉えました。こうした全的な個人がYMCA体験をとおしてより良き「市民社会」の造り手・担い手となることを願い、活動を展開してきたと言えます。学習やスポーツといった特定事業でも、YMCAとして意図する目標と評価は、他の領域すべてに関わって想定、設定することが期待されてきました。忘れてならないのは、目標と評価の焦点は常に「個人」に当てられ、その個人は、社会を担う主体であろうとする「市民」として期待されていたことです。

別の視点から言うと、YMCAが願ってきたのは「市民」「個人」の育成であって、「国民」や「臣民」ではありませんでした。だから、ロンドンに誕生したYMCAは、イギリス国内に止まらず、瞬く間に全世界に拡がりました。YMCA運動では、国籍も人種も、言語、年齢や肌の色、やがて性別も宗教も、垣根となりませんでした。様々な属性で人を分断する「○○ファースト」から全く自由で平等な交わり（アソシエーション）でした。YMCAで起きていた出来事は、常に「隣人」としての出会いと交わりでした。

いま世界は、グローバリゼーションと新自由主義が生んだ分断と憎悪の嵐の中にいます。「国家」が再びプレイヤーとして期待を集め、「帝国主義」さえ復権しています。国連が誕生して80年、国家間の戦争は終息と思われた時代は去り、「新しい戦前」が日本でもささやかれ始めました。国籍や人種、言語といった属性を無化し、「隣人」として誰とでも等しく手を携えるYMCAには冬の時代の到来と言えるでしょう。

しかし、だからこそ YMCAは、過去をどう捉え、今と未来を描いていくか、実力を問われています。国家間の戦いと憎悪の過去によって、私たちの現在が決められてはなりません。むしろ私たち市民は国境を越えて主体的に未来を選びとり、その未来像を起点として現在をみつめ、過去を振り返る必要があります。

YMCAが「市民」の運動として形成してきた信頼のネットワークを活かし、偏見と排除から自由な社会像（「神の国」）を描き、世界に提示していく使命が私たちにはあります。2千年前、ローマの圧倒的軍事支配の下でなお憎悪と暴力を排し、敵さえ愛されたイエス・キリストに従う者の運動として。

●全国のYMCAのさまざまな活動はこちらからもご覧いただけます。https://www.ymcajapan.org/

国内外から50人 平和を語り合う
広島YMCA International Youth Peace Seminar

8月5日～9日、インド、中国、台湾、韓国など国内外のYMCAから約50人が広島に集い、被爆者証言や原爆資料館の見学を通して核兵器の脅威を学びました。このセミナーは1978年に始まったもので、戦後80年の今年も8月6日の平和記念式典に参列し、共に祈りを捧げました。準備にあたった広島YMCA国際ユースリーダーの浅野由梨香さんに感想を聞きました。

後列中央左が浅野由梨香さん

私は大学で国際関係を学んでいるつながりから今年３月、広島YMCAの国際リーダーになりました。ひたむきに平和を考えるリーダーたちに惹かれて、その輪に加わりたいと思って参加を決めました。

準備ミーティングで私たちが大切にしたのは、戦争の悲惨さを学ぶだけでなく、それを自分の行動につなげていくセミナーにしたい、ということでした。原爆は、私たちには恐ろしすぎて、どこか別世界のような、受け止めきれないものがあります。それを何とか消化して自分の行動に活かせるように、資料館や慰霊碑などを見学した後の2日間でいくつかのワークショップを企画しました。

一つは「Mother's Lullaby（マザーズララバイ）」というワークショップです。広島の「物」の視点から考えてみるもので、たとえば原爆ドームは、戦前どんな施設でどんな日常があったのか、被爆した時は何を見たのか。そんな風景をドームになりきって思い描いてみるものです。中学校の英語の教科書にあった、被爆樹木を主人公にした話をもとに考案したワークでしたが、参加者からは「はじめて原爆を“自分事”として感じることができた」という声が寄せられました。ほかに「Mytopia（マイトピア）」という、理想の国を作るワークもしました。参加者はたくさん語り合う中で打ち解け合って、輪ができあがって、笑顔になっていきました。セミナー自体が小さな平和な社会になっていったのは嬉しかったです。

戦後80年は一つの節目ですが、私たちが伝えるべき平和はいつの時代も変わりません。今後もこういう小さな平和を積み上げて、大きな平和を創り出していきたいと思います。

広島YMCA国際ユースリーダー　浅野 由梨香

参加者の感想文・報告書はこちら ▶

アマゾンYMCAサミット2025
児童養護施設から子どもたち25人が参加

神奈川県内の複数の児童養護施設の子どもたち25人を、8月23日～24日、富士山麓のYMCA東山荘に招待し、YMCAの大学生メンター、アマゾンジャパンの社員ボランティア、児童養護施設職員や関係者総勢58人で、「アマゾンYMCAサミット2025」を行いました。

2019年からアマゾンジャパンと日本YMCA同盟はパートナーシップを結び、児童養護施設の子どもたちにプログラミングなどSTEM教育を定期的に提供しています。夏休みを活用し、昨年に引き続き宿泊を伴って、本格的なミニ四駆制作と走行、ネイチャークラフト、バーベキューなどさまざまな体験を楽しみました。

多くの大人が見守る安心で安全な環境、そして大自然の中で、子どもたちは普段よりチャレンジ精神旺盛に、制作したミニ四駆を思い切り走らせてみたり、ウォータースライダーに果敢に挑戦したりと、夏の思い出を作っていました。インドや韓国など多国籍なアマゾンの社員ボランティアも、子どもたちに積極的に関わり、今後、ボランティアを更に推進していきます。

同行した児童養護施設の職員から、「いろんな大人の関わりや存在が、子どもたちの新しい一面を引き出し、成長への一歩になっていて私たちも驚き、感謝しています。普段はできないダイナミックな体験も楽しく、またぜひ参加したいです」との声が寄せられました。

日本YMCA同盟　横山 由利亜

能登半島地震・豪雨一年　輪島市の小中学生20人がサマーキャンプ

8月18日～20日の3日間、国立立山青少年自然の家で「能登立山フレンドシップキャンプ」を開催。輪島市の小中学生20人と、滋賀YMCAと富山YMCAの子どもたち11人、ボランティアリーダー、スタッフ計43人が炎天下にも負けずにキャンプを楽しみました。

初日のハイキングでは、ビンゴカードを手に森の植物や生き物を探索。夜は満天の星空の下でキャンプファイアを囲み、ゲームや歌を通して子どもたち同士の距離は一層近くなりました。2日目は軽登山に挑戦。急斜面もありましたが、グループの仲間と地図を確認しながら、富山平野が一望できる峠まで全員無事に登頂。達成感に満ちた子どもたちの表情がとても印象的でした。帰りのバスでは、キャンプ中に歌った「あしたは晴れる」などたくさんのキャンプソングを歌い、再会を誓い合いながらそれぞれの地へと帰っていきました。

能登半島地震の発生から一年半、そして豪雨水害からまもなく一年を迎えます。復興の道のりは長いですが、キャンプでつながった心の交流を糧に、希望をもって成長していってほしいと願っています。

キャンプディレクター：富山YMCA　中川 喬之

参加者保護者の声

地震後に避難所で暮らしていた時、YMCAの人たちが手伝いに来てくれました。以来、我が家の子どもたちはYMCAのキャンプやクッキングなどに、欠かさず参加しています。町野町では今年、豪雨で浸水した小中学校が再開しましたが、転出した家庭も多く生徒は半分に減りました。野球場などがあったスポーツセンターは仮設住宅になり、遊び場も限られて寂しいです。地震と豪雨で町も生活も全く変わってしまいましたが、子どもたちには新しい出会いを大切にして成長してほしいと思っています。

宝くじ協会から助成

一般財団法人日本宝くじ協会より助成金の交付を受けて、集会用テント37張、宿泊用テント21張を購入いたしました。テントは全国19YMCAの拠点や保育園・幼稚園などに贈られ、地域のイベントや運動会、バザー、チャリティーラン、災害時の支援活動などに用いられます。感謝してご報告申し上げます。

とちぎYMCA サッカー大会